

一つの賭

先日開催された白陵会役員会の席で、昭和41年2月25日発行の校内新聞「陵友」第7号に目を通す機会がたまたまあった。ここにその一部を紹介したい。

昭和41年は、私の生まれた年であるが、その同じ年に我が白陵高等学校の第一期生が卒業している。従って記事の内容は、まさに「祝！第一期卒業生」特集であった。

表の写真には、建物は本館、音楽室、寮のみで、ブルドーザーが何台か見える工事中の学園全景が映し出されており、その横に大きな文字で「栄光あれ!!我らの一期生」とある。河路校長先生の「卒業生諸君へ」に始まり、表も裏もほとんどのスペースが「第一期“卒業生へのメッセージ”であふれている。それらひとつひとつの言葉からは、第一期生が先生や生徒たちからどれほど大きな祝福を受け、期待されながら、新設校「白陵」を巣立っていくようとしていたかが、よく伝わってくる。

今は亡き三木園長先生も、第一期生を送り出すことには、もちろん格別の喜びとともに限りなく大きな期待を抱いておられたようだ。

「卒業生に贈る」と題した言葉の中で、こう言われている。「新しい学園に最初に迎えた生徒であった諸君は、新しい意欲と新しい意気に燃えていた。日々、為すことのすべてが学園の伝統となり、慣習となった。」としかし一方で、「諸君の責任は真に重く、諸君の残した足跡をすべての後輩がたどり踏み固めていくことになる。」と強烈なプレッシャーを与えておられる。学園の将来の方向性を決めるとなると、思い入れと期待は、測りしれないものがあつたに違いない。そして、その並々ならぬエネルギーを受け取った第一期生の方々が残された伝統や慣習は、形を変えながらも現在の「白陵」に確実に受け継がれているはずである。

ただそのことよりも、園長先生をして、「(入学当時、仮校舎の基礎工事も行われていない)そんな学校を母校として選ぶことは、“一つの賭”であった。」と言わしめたように、当時新設校に入学するということは、たとえいくらかの評判や情報があつたとしても、相当覚悟のいる冒険であり、まさに“賭”であつたに違いない。私を含めすべての後輩が、その足跡をたどっていることを考えると、そのような大きな賭に出られた第一期の先輩方の勇気と根性には、ひとまず敬意を表さなければならぬと思う。



会員の皆様へ

白陵会会長 沼田 好道

暑中お見舞い申し上げます。

会員の皆様方には、ますますご隆昌のこととお慶び申し上げます。

平素は本会活動にご協力賜り誠にありがとうございます。

さて、白陵は大学入試において今年も素晴らしい成績を挙げました。

また、昨年から始まった中学校男女共学化や高校ロンドン修学旅行も鮮やかな成功をおさめ、進学成績と相俟って学校の評価を一層高いものになっています。

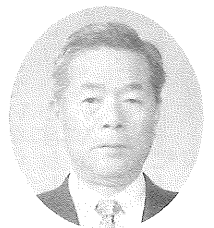
このように、母校が二十一世紀に向けて更に魅力あふれる学校へと力強く発展していく姿を目の当たりにすることは同窓会としても誠に嬉しい限りでございます。

私もこの四月から原田耕作先生の後任として歯科校医をお引き受けし、生徒の皆さんと接する機会が増えましたが、礼儀正しく澆刺とした後輩諸君の姿の中に白陵の伝統の確かさを感じています。

また、このたび最高参事（前教頭）の濱田忠彦先生がご退職になりましたが、旧制姫高の卒業生でもあられた先生は、常に故三木省吾学園長先生と共に生まれ、白陵創立以来、実に三十六年の長きにわたり白陵の発展に多大のご功績を残されました。同窓会活動にも顧問として格別のご指導を賜っていただきましたが、ご退職にあたり心より厚く御礼申し上げますと共に今後のご健康ご多幸をお祈りしたいと思います。

白陵会では、同窓会名簿の発行、会報「Alma Mater 白陵」の発行、そして総会の開催、この三つを柱に活動を続けておりますが、来年は二〇〇〇年総会開催の年になります。従前にも増して充実した総会を目指して鋭意準備を進めてまいりたいと思っております。

会員諸氏の益々のご活躍を祈念し、今後一層のご協力をお願い申し上げます。



ごあいさつ

校長 浅江 季典

白陵会員の皆様、ますます御清栄のことと拝察し、心からお慶び申し上げます。

さて、皆様の後輩である在校生達も先輩諸氏に負けないよう努力いたしております。大学への進学状況については別途記載のように、東大30名、京大22名など例年と同様まずまずの成績結果を修め、「天下に白陵あり」とその存在を見事に示してくれました。また、部活動の面においても、柔道兵庫グランプリ中学選手権大会（無差別）において中3江里口君が優勝、将棋部は県大会男子団体（高3大西、高2青山、高1今井）で優勝、女子個人戦において高2内田さんが優勝し、夏休み中に山形県天童市で行われる第23回全国総合文化祭将棋部門に出場するなど各方面で顕著な活躍をしています。約80%弱の生徒がどれかの部に所属していますので施設、設備共に十分とは言えませんが、それぞれ工夫して平素の練習や活動を行い、各部とも頑張っております。

今年で二回目を迎えることとなった「ロンドンとその郊外」への修学旅行には、高校二年生197名が参加しました。6月15日から6日間の旅でしたが、全員元気に予定した日程を終え、無事帰国しほっと一息というところでありました。雨が多く、6月の平均気温18℃と聞いていましたが、白陵の旅行団が到着した日は31℃と大変気温が高く、まったく暑いロンドンを体験いたしました。旅行期間中好天気が続き現地での活動がほとんど予定通り実施できたのは誠に幸運でした。本校の建学の精神に色濃く影響を与えているイギリスの私学教育の佇まいを垣間見て多くの生徒達が心の深いところで何かを感じ取ってくれたように思っています。また、ウエストミンスター寺院等の歴史的建造物の見学、シェークスピアの生家があるストラットフォード・アポン・エイボン等のロンドン郊外の散策の体験等を通じて国際的視野を広げるだけでなく、学問することの意義や堅実な生き方にまで思いを馳せている生徒もいました。しかし、各見学地などで生徒たち様を見ていると一人ひとり知的興味、関心や英語で現地の人と交流しようとする意欲と一人ひとりの旅の成果は大きく変わってくるかと強く感じました。例えば、大英博物館で初めて見るミイラを恐る恐る覗き込み現地ガイドの説明に耳を傾ける生徒が大部分ですが、当時のイギリスまさに大英帝国の政治力、経済力、歴史や文化遺産への畏敬の念の強さ等について考える生徒もいました。修学旅行を単なる観光旅行でなく実践的教育の場として充実させるためにも毎日の授業の中で多角的、多面的なものの考え方を指導することの大切さを痛感させられました。

白陵会役員名簿

役名	期	氏名	役名	期	氏名	役名	期	氏名
会長	3	沼田 好道	常任幹事	12	吉野 太司	常任幹事	32	伊賀有紀子
副会長	3	天野 泰文	〃	13	水田 堅	〃	33	藤井 拓郎
〃	6	上田 喜裕	〃	13	矢野 善人	〃	33	魚橋由美子
〃	10	吉田 達哉	〃	14	片山 安孝	〃	34	八尾 晋典
理事(総務副委員長)	1	芝本真須美	〃	16	田中 正一	〃	34	牧野 琢丸
〃(総務副委員長)	1	武田久美子	〃	18	秋田 直樹	校内幹事	1	芳木 健憲
〃(校内幹事総代)	2	川副 義文	〃	19	牛尾 英樹	〃	2	大内 義博
〃(総務委員長)	2	湖中 明憲	〃	19	尾上 尚樹	〃	3	長濱 憲雄
〃(研レ委員長)	3	神吉 裕資	〃	20	石井 秀武	〃	3	黒田 洋
〃(研レ副委員長)	4	森崎 晴友	〃	21	河合 恵介	〃	4	原田 正和
〃(広報委員長)	10	下村 康夫	〃	22	新田 智弘	〃	6	福井 孝昌
〃(広報副委員長)	11	志方 正彦	〃	23	三木 健史	〃	11	小紫 一貴
〃(会計)	10	加藤 雅宣	〃	23	中里 寛	〃	11	宮崎陽太郎
書記	17	岡野 清和	〃	24	奥本 光廣	〃	12	畔上 昇
会計監査	6	大崎 章快	〃	24	藤原 省悟	〃	12	山口 透
〃	15	町田 直隆	〃	25	多根 正明	〃	12	中村 大吾
常任幹事	1	伊藤 達也	〃	27	山田 将義	〃	14	久保 博彦
〃	1	正井 和野	〃	28	柿本 晴彦	〃	15	村上 幸生
〃	4	岸本 和男	〃	28	松本 守弘	〃	15	西 善弘
〃	5	塩崎 育男	〃	29	川田 雅彦			
〃	5	橋本 義仁	〃	29	長濱 道治	顧問(理事長)		三木 一正
〃	7	萩本 義郎	〃	30	上新 貴弘	〃(校長)		浅江 季典
〃	8	山戸 敏彦	〃	30	石川結香子	〃(教頭)		中安 久隆
〃	8	黒川 仁	〃	31	酒井 雅史	〃	1	遠山 寛
〃	9	鄭 幸男	〃	31	木下 智晴	〃	1	黒坂 康夫
〃	12	若松 修	〃	32	酒井 勇人	〃	1	黒川 芳一

※現在、26期の常任幹事が前任者の都合により空席となっております。後任に心当たりのある会員はご一報下さい。

平成11年 大学入学試験合格者数

国公立大学				
大学名	9年	10年	11年	
東 京 大	33	29	30	
京 都 大	20	28	22	
大 阪 大	26	21	28	
神 戸 大	17	8	12	
北 海 道 大	4	1	3	
東 北 大	5	5	3	
一 橋 大	6	5	6	
筑 波 大	2		1	
東 京 工 大		3	1	
横 浜 国 大	2	4	1	
岡 山 大	10	5	3	
広 島 大		6	3	
九 州 大	2	2	3	
大 阪 市 大	3	1	2	
大 阪 府 大	4	4	11	
そ の 他	43	41	43	
合 格 者 計	177	163	172	
(内医学部)	(19)	(15)	(20)	

私立大学				
大学名	9年	10年	11年	
早 稲 田 大	46	30	33	
慶 応 大	36	43	23	
上 智 大	1	1	4	
中 央 大	2		4	
東 京 理 大	11	9	6	
関 西 学 院 大	24	20	19	
関 西 大	18	6	11	
同 志 社 大	43	22	19	
立 命 館 大	24	7	20	
近 畿 大	6	3	4	
大 阪 医 大	1	1	2	
兵 庫 医 大	3	3	4	
京 都 薬 大	4	1	2	
神 戸 薬 大	1	2	3	
そ の 他	32	23	20	
合 格 者 計	252	171	174	
(内医学部)	(13)	(10)	(14)	
卒 業 生 数	195	192	200	



老いのくりごと

濱田 忠彦

同窓会の皆さん、いかがお過ごしですか。

いきなりわたくしごとで恐縮ですが、この三月末でもって白陵高校を退職いたしました。開校以来随分と久しい間、多くの方々につきっかお世話になり、本当にありがたいことと存じています。

三十余年前に、あるいは今年、この学園を巣立っていかれた方々、それぞれの思い出をお持ちのことでしょうが、あの体育館の壇上で園長の前に立ち、卒業証書をお受けなされた方々、—おそらく十八回生が最後ではなかったかと思いますが—時としていかめしげな、時として親しげな、ひよつとして悲しげな趣を示しながら、湧き上がる解放感を押さえるのに懸命であったことでしょう。あるいは園長から教えを受ける機会をお持ちになれなかった方々、はや二千に垂んとする数と思いますが、それでも在学中折につけ様々なお話しをおききであったかと思えます。

いかにも不思議な方でした。おおらかさとこまやかさ、きびしさとあたたかさ、対照的なものをないまぜながら魅力ある人柄がつけられていました。私が園長を存じ上げたのは昭和三十年頃ではなかったかと思えます。当時京都の白川通り—今は賑やかな街となり、年末の高校駅伝のコースにもなっています、かつては草茫々のただっぴろいだけの通りでした—の下宿にわたしはいました。その通りの北の果、修学院一乗寺—あの宮本武蔵・吉岡一門の決闘の場—に友人の下宿がありました。遊びにいったところ、たまたま同宿の人で、同じ高校の出身であると紹介されたのが園長でした。当時園長は司法試験を受けるべく勉強中とのことでした。

皆さんご存じの通り、園長は姫路の北東の郊外、市川に近い豊富町にお生まれと生きています。あるいは父君の教育のご方針だったのか、小学校は汽車に乗って姫路市内に通われたそうです。何しろ本数の少ない田舎の列車のこととて、帰り、一本乗り遅れると本屋によって時

間待ちすることが多かったと伺っています。園長の本好きはその頃既にあつたのでしょうか。父君も亦いかにもうなじの硬さの窺われる魅力ある方で、園長がお好きな英文に進まれることをあきらめて、法科にいかれたのも恐らくは父君の厳命ではなかったかと思えます。父君、昔姫路中学—当時姫路市の京口にありました—に通われていた頃、毎日二里余りの道を歩いて往復なされたそうです。朝は朝日を顔の左側に、帰りは夕日と同じ側に受けて通つたので、顔の右左、全く色が変わってしまったなどとお話を伺つたこともありました。和辻哲郎先生もお近くから通つておられたそうで、殊に少し下級の生徒で都築正男という方の才能、人物、口を極めて称えていらつしやいました。過日、令息伊作氏のお書きになった“矢内原忠雄伝”という本を読んできましたが、忠雄先生が明治四十三年一高に入学、その南寮一〇番という部屋に入室なされたところ、同室者十一名の一人に都築正男先生—後に東大外科教授—がおられたとありました。その頃の父親はやはり厳父というのがふさわしく、園長の父君も伴の進学に関してもそうであつたでしょうし、矢内原先生にしましても、令息のお書きになったところによりますと、日常生活で、例えば食事の時などうっかり世間風な冗談を言つて笑つたり、食器をガチャツと音たてたりすると急に箸を置いてしまつてじろつと睨まれたとのこと、だからびくびくしながら一刻も早く落度のないように食事を終えて自分の部屋に逃げこむことばかり考えていたということです。更に伊作氏が昭和十年四月、中学四年修了で一高理乙に入学された折、難関の入試合格で憧れの一高生になつて有頂天だったのに、父は少しもそれを喜んでくれなかつた。四年からはいるのは早過ぎる、ろくなことはない、殊に寮生活は不潔で、だらしなくて、墮落の温床だ。”と、苦虫を噛みつぶしたような顔だったとありますが、伊作氏は父のきびしい監督を逃れるため、いそいそと入寮されてしまつたそうです。

いまここに“事変後の学生”ということばを持出します。これは満州事変（昭和六年九月勃発）後に高等の学校に入った学生のこと、これらが支那事変（昭和十二年七月勃発）にかけて、以前の学生と次第に交替し、満州事変後の学生に、それ以前に学校を卒えた人々とはつきりと異なる層が観られるということを聞きました。昭和初期までに学業を終えた方とは、遅くとも明治末期までに生まれた人でしょう。

ならば事変のあとさきでどう変わったのでしょうか。ここに「知能」と「知能」とを分けて考えると、いわゆる知識については変化はないむしろ時の経つにつれて増しているであろうが、知能の低下は争えないというのです。その知能とは何か、知的能力、ひろくいえば体力・道徳性・意志力・批判力であるというのです。

いつの世でも、若き世代の人間形成には、自らの主体的責任とともにその時代の外的与件が大きく影響するのは当然であります。満州事変後、それまであれほど旺んであった学生の社会的関心は薄らぎ、批判性も失われていったといわれます。これは当時の国の学生への積極的、干渉的教育政策を無視しては考えられないことでしょう。学生は次第に内向的となっていくます。そして大正初期から中期にかけて出版された西田幾多郎・阿部次郎・和辻哲郎・倉田百三といった方々の著書が再び愛読されるようになりました。かつて大正教養主義をつくられた方々の著書が再び愛読される現象が、直前の科学的社会主義盛行現象を揚棄してのものであったなら、以後日本の進んだ道もあるいは変わっていかもわかりません。それが当局による学生への干渉的政策、あるいは学生の日本情緒的転向などの結果とすれば、あるいは満州事変後の日本の歩みは必然であったでしょう。明治という明確な国是の治世下に生を享けた人と、大正以降不安定の国是のもとに生まれた者と、その環境の及ぼす影響にやはり差があったのでしょうか。そして支那事変前後に刊行された河合栄治郎編の「学生ものシリーズ」は当時の学生にとつての、たしかに教養の良心的案内書ではありましたが。出隆「哲学以前」から長与善郎「竹沢先生といふ人」まで二百冊近くの必読書案内は親切極まりないものでしたが、これらに導かれる若者のどこに読書の必然性があったのでしょうか。例えば、西田幾多郎「自覚に於ける直感と反省」―先生が「この書は余の思索に於ける悪戦苦闘のドキュメントである」といわれた―など、必読書とされていたが、この難解の書を一介の青書生の主体性において読むことが果たして可能であったでしょうか。激動する世情に背を向け、観念の世界に漂う姿のおぞましさに忤怩たらざるを得ません。

昭和四十二・三年頃、吉川幸治郎・貝塚茂樹・大塚久雄といった先生方―いづれも明治生まれ―が相次いで大学の退官講義をなされました。当時国外ではベトナム戦争・紅衛兵旋風といった嵐がすさんでいました。国内でも、いわゆる学園紛争の騒然とした世の中でありま

した。講義はいづれも国内外の騒擾には一言もふれず、純粹の学的雰囲気のうちで肅然と行われたそうです。これらは騒擾を無視してのことではありません。それを見据え、その上になつ静謐の境地において行われたのでしょうか。よきアカデミズムのあるいは最後の姿だったのかもしれません。紛争中の学生はアカデミズムを専門バカと称し、これを強く批判しました。揚げ句、



専門は消え、残ったのは目先のことばかりにかかずらう瑣末主義、つまりはバカだけということになったのでしょうか。

もって伝えようとするのでしょうか。

「昨今、奇態な世相といつていいと思いますが、かつて大きな騒ぎの対象となった昭和三十五年・四十五年の安保新条約よりもあるいはわれわれにとつてもっと切実なかかわりをもつと思われる、いわゆる周辺事態法がたいした論議もなされないままに成立してしまいました。激動する世界情勢に接続なく、政治・経済はては教育に至るまで対症療法的な施策の多い世の中でありますが、国語の授業数をけずられた小学生が、どんなことばでもつてものを考え、どんな文をパソコンであらわし、己れのなにをとかない？ 英語で

むかし、正月まで自宅に呼びつけられ、授業を受け(させ)られた皆さん、帰りの終列車の時刻を心配しなければならなくなるまで、授業を受け(させ)られた皆さん、あるいは当時の園長の齢を既に遙かに越えられた方も多いいと思いますが、あの教養主義をかけた園長の若き日の授業姿に巧まざるアプレンクング(いざない)として明治人間の頑固さ・一徹さを偲ぼうではありませんか。

白陵軍団全員集合(11)

白陵さきもりの会実施報告について



平成10年8月9日(日)一五〇〇に母校白陵の所在する兵庫県内において、白陵OBで自衛隊勤務者(出身者)の融和団結を図るべく、懇親会を実施しました。

当日、参加者は伊丹駐屯地に勤務する2期佐々木、3期津萩、10期三木、15期石田これに川西駐屯地から21期野崎、所沢基地から10期尾崎さらに所沢市から現在民間において医師として活躍中で息子さん3人を伴って参加の9期奥本の各氏が集い、会長(2期佐々木)挨拶に始まり、副会長(3期津萩)の今後の活動への所信表明、現在民間で活躍中の9期奥本氏による盛大な乾杯の音頭により、威勢良くビールが飲み干され、じご白陵在校当時の思い出や自衛隊生活の思い出話、さらに近況連絡に花を咲かせ、奥本さんの息子さん3人の元気の良さにもあおられつつ、食べ放題飲み放題の大量の糧食類も追加に継ぐ追加の様相となった。その盛り上がり料亭のおかみもびっくり仰天し、予定時間終了の知らせもないまま、大幅に時間を超過しつつも、今後の活動方向として、在住者の多い「関東」をはじめ、「関西」「北海道」等の各地区にお

いても懇親会を開催していくことで全員の賛同を得て、最後に今後のさきもりの会の発展と会員相互の健闘を期して白陵校歌、白陵寮歌を合唱した時には外はすでに夕闇となっており、勇士は、じご薄暮戦へと移行していきました。

現在、約40名の会員がおり名簿作成に努めておりますが、氏名(期別)、住所等が不明確な場合もありますので、旧知の方は相互に周知徹底を図っていただきますようお願いいたします。

【名簿に関する連絡先】

15期石田悦也

〒560-0000

大阪府豊中市北緑ヶ丘

1-7-22-506

TEL 06-856-4677

または、24期三村敬司

〒665-0814

兵庫県宝塚市山本野里3官舎

13-402

TEL 0797-88-5759

(白陵さきもりの会事務局記)

までお願いいたします。

追伸、その後規模の大小はありますが、さきもりの会の開催も第6回をかぞえ、そのうちには白陵校の訪問もさせていただきました。有難うございました。

白陵今昔物語 (13)

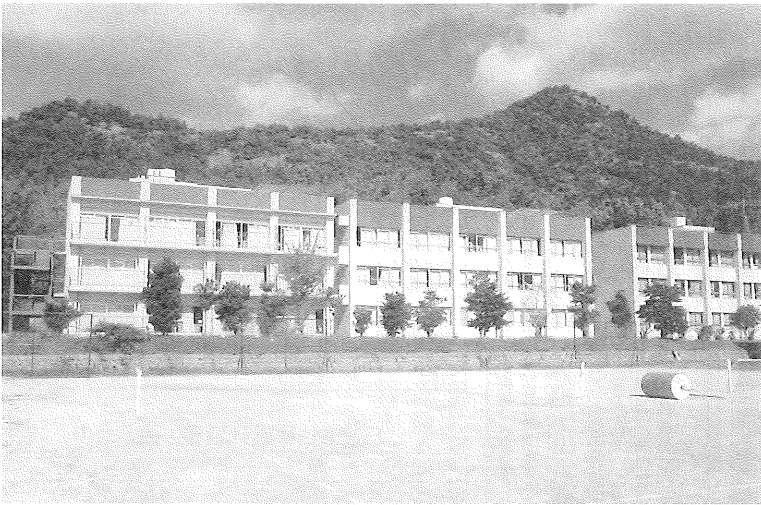
「白陵寮」

白陵寮は、第一寮が開校二年目の昭和四十年に完成し、以後、遠隔地生徒の増加に伴い、昭和四十三年に第二寮、昭和五十一年に第三寮、昭和六十一年に第四寮と次々に増築され、現在では二百名の収容能力があります。更に、平成三年には全室に冷暖房が完備され、寮生の憩いと研鑽の場として快適な生活環境が整備されています。

今回の白陵今昔物語では、白陵にあつて最も白陵生らしい人材を世に送り出し、寮生OB諸氏には懐かしの我が家ともいえる男子生徒寄宿舎「白陵寮」を特集することにしました。

さて、皆様方は「白陵」の校名の由来を先刻ご承知のことと思いますが、白陵の名は、創設者の故三木省吾学園長が青春時代に学ばれた旧制姫路高等学校の寄宿舎「白陵寮」から名付けられました。そして、旧制高校の教育の真髓を建学の精神とし、旧制姫高の寮の名前をそのまま校名として、その校章と共に受け継いでいます。初期の卒業生の中には、故園長先生と共に旧制高校の寮歌祭に出場した人も多かったと思いますが、あ、白陵の春の宵、惜春の譜の流れ来て……、で始まる旧制姫高の寮歌「白陵歌」は今なお白陵生に脈々と歌い継がれています。従つて、故園長先生の寮に対する思い入れは相当なものがあつたようですが、寮を基盤とした人間教育を目指された先生のお気持ちがよく表れている一文がありますので、この機会に紹介させていただきます。『教育に最も大切なことは規律である。規律のないところに教育はない。生徒の成績の良否はその才能よりむしろそ

の努力によって決まる。努力を維持し続けるのは意志の力である。昨今の生徒に最も欠けているのは強靱な意志の力ではなからうか。家庭は



生徒にとって良い学習の場とはいえない。両親は子どもに対しては良き教師たり得ない。これは医者がわが児に対し良き医者たり得ないのと

一般である。家庭では常に何らかの口実が罷り通る。親は子供が語る授業の不満、試験の不平、教師の批評を信ずるものである。しかし、逆に生徒の持つこの不満点にこそ家庭で効果を期待し得ない学校の良さがある。ことに高校生の世代を厳格な規律で鍛えるのは何よりも望ましいことである。全寮制度は私見によれば最も理想的な教育の場といえよう。かつて旧制第一高等学校は全寮制度であつた。当時校長であつた新渡戸稲造先生のもとへ、新入生の父兄が自ら家庭における教育が如何に万全であるかを力説し家よりの通学の許可を請うたことがあつた。新渡戸校長は、家庭の教育が理想的なれば、一高へ入る必要はなからうとその要請を断られたという。」

園長先生らしい表現で、先生が理想とされた寮の姿の一端が述べられています。

さて、現在の白陵寮では、冷暖房も完備され、夜食の販売、月二回だった外泊制限の廃止など先輩諸氏にとっては信じ難い進化をしている点もありますが、基本の精神は昔と同様で寮監の指導のもとに節度ある日常生活が展開されています。神戸方面からの交通の便も良くなった上に少子化時代を反映してか、寮生は年々減少の傾向にあるようですが、集団生活で培われる社会性や倫理観、道徳心をわきまえた自主性など、寮生活を通じて得られる豊かな人間性が、甘えが通用しない実社会でいかに役立つかは、貴重な寮生活を体験された寮生OB諸氏には実感としてお解りのことと思います。

個性尊重の名の下に自己中心的な身勝手な行動が容認され、学校の大衆化が懸念される今の時代にあつて、真のエリート育成を目指す白陵の教育方針は今後一層その輝きを増すことでしょう。

白陵会 平成10年度決算報告書
平成10年4月1日～平成11年3月31日

収入の部 単位 円
科目 予算額 決算額 差異
前年度繰越金 17,406,444 17,406,444 0
会費収入 3,000,000 3,002,000 Δ2,000
終身会費 3,000,000 3,000,000 0
臨時会費 0 2,000 Δ2,000
寄付金収入 10,000 0 10,000
会費外収入 1,635,000 644,065 990,935
名簿収入 1,500,000 366,600 1,133,400
広告収入 95,000 245,000 Δ150,000
利息収入 40,000 32,465 7,535
雑収入 0 0 0
総会積立金繰入収入 0 0 0
合計 22,051,444 21,052,509 998,935

支出の部 単位 円
科目 予算額 決算額 差異
事務費支出 125,000 52,545 72,455
消耗品費 20,000 0 20,000
印刷費 10,000 0 10,000
通信費 50,000 49,510 490
支払手数料 40,000 3,035 36,965
雑費 5,000 0 5,000
会議費支出 1,000,000 781,093 218,907
理事会費 100,000 47,111 52,889
役員会費 800,000 725,252 74,748
委員会費 100,000 8,730 91,270
事業費支出 2,400,000 1,262,854 1,137,146
総会費 0 0 0
名簿発行費 400,000 20,394 379,606
会報発行費 1,000,000 895,733 104,267
卒業記念品費 900,000 201,600 698,400
慶弔費 100,000 145,127 Δ45,127
備品費支出 0 0 0
渉外費支出 50,000 0 50,000
予備費支出 500,000 0 500,000
小計 4,075,000 2,096,492 1,978,508
総会積立金 250,000 250,000 0
次年度繰越金 17,726,444 18,706,017 Δ979,573
合計 22,051,444 21,052,509 998,935

白陵会 平成10年度 会務報告

年月日 内容 年月日 内容
10.4.23 理事会・名発委会 7.18 広報委員会
4.30 会長副会長会議 9.15 白陵運動会
6.8 理事会 11.22~23 役員親睦旅行
6.20 定例役員会 11.2.10 34期生卒業式

平成九年度版 白陵会名簿販売中

白陵三十周年記念誌から転載した年表を盛り込んだ価値ある名簿です。ご購入ご希望の方は、卒業期生・氏名・送り先を明記の上、次の要領でお申し込みください。一冊 三七〇〇円(送料込)

現金書留の場合

〒六七六〇八二七 高砂市阿弥陀町阿弥陀二二六〇 白陵高等学校内 白陵会事務局宛

郵便振込の場合

口座番号 神戸〇一六〇九一四五〇四〇 加入者名 白陵同窓会

クラブ活動 トピックス

将棋部は男子個人戦で全国大会出場するなど毎年活躍を続けていますが、このたび開催された兵庫県高校将棋選手権大会男子団体において、灘高などの強豪に競り勝ち見事団体初優勝を遂げ、全国大会出場の切符を手に入れました。また、女子個人でも初優勝し、揃って、山形県天童市で開催される全国大会に出場することになりました。

陵友通信

●今竹大祐氏(五期生、高砂市議会議長に就任) 五期生の今竹大祐氏(高砂市米田町)は、昨年、高砂市議会において高砂市議会議長に選出され、平成十年九月より議長のお務めを務められています。 ●北口寛人氏(十九期生、兵庫県議員に初選) 十九期生の北口寛人氏は、四月の兵庫県議会議員選挙に父の故北口進氏の後を受け

後輩諸君が頑張っています。ぜひ応援してあげてください。

将棋部(男子団体・女子個人) 全国大会出場

●目指せ!全国大会出場(柔道部) 名門白陵柔道部の江里口光太郎君(中三)は兵庫県中学校柔道選手権大会優勝をはじめ、数多くの大会で上位入賞を果たしており、この夏の全国大会への出場に期待が高まっています。

夏の高校野球兵庫県大会

▽1回戦(尼崎記念) 白陵 000000010 尼崎西 01100010x 3 1

白陵会 ニュース

白陵会 物故者(心よりご冥福をお祈りします。) 藤井哲郎先生 (現職) 昭和59年(社会) 平成11年2月逝去 勝谷さわ子先生 (旧職員) 昭和51年(平成3年在職) 平成11年5月逝去 英語

★退職教職員紹介

濱田忠彦先生 最高参事・国語 昭和38年(36年間) 在職 岩本 進先生 (英語) 昭和63年(11年間) 在職 橋本肇子先生 (養護) 昭和47年(27年間) 在職 佐伯純生先生 (社会) 平成7年(4年間) 在職

★秋の文化祭、運動会に出かけてみませんか。

恒例の白陵祭が近づいてきました。この機会にぜひ懐かしの学舎を訪ね、後輩諸君の活躍ぶりを見ながら先生方とお話ししてみたいかがでしょうか。 文化祭 九月五日(日)、運動会 九月十五日(水、祝)

編集後記

★広報委員会では、「白陵軍団全員集合」の企画を継続して募集しています。クラブ・職場・地域等の単位でお集まりの機会があれば、ぜひご一報ください。卒業期やクラス単位で同窓会を開催された時の様子をお知らせいただくと大歓迎です。楽しいお便りをお待ちしています。

★先日役員会で、本会役員(二十期常任幹事)の石井秀武氏より、四月の兵庫県選に神戸市西区より新人で立候補したが次点に泣き残念至極、次回を期して頑張りたいとの報告がありました。役員としても頑張ってくれているだけに、出席した他の役員からも暖かい励ましを受けていました。